

氏名	山本 慎平	
学位の種類	博士（経済学）	
学位記番号	第 6107 号	
授与報告番号	(甲) 第 3427 号	
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 24 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項	
学位論文名	新渡戸稲造の保守的自由主義 —イギリス流の教養作法・人格・自由—	
論文審査委員	主査 教授 大島 真理夫	副査 教授 脇村 孝平
	副査 教授 中村 健吾	

論文内容の要旨

札幌農学校を卒業した農政学者、旧制第一高等学校校長、植民政策担当の東京帝国大学教授、国際連盟事務次長など、多彩な活動で著名な新渡戸稲造(1862～1933年)の思想史的研究である。

章別構成は次の通りである。

序章

第 1 章 旧制第一高等学校校長時代における新渡戸稲造の指導者教育論—『校友会雑誌』を中心に—

第 2 章 大正期における新渡戸稲造のデモクラシー論

第 3 章 昭和初期における新渡戸稲造の自由主義論

終章

序章では新渡戸の経歴の概略と時代状況を押さえたうえで、先行研究のかなり詳しい紹介を行い、それらとの関係で自身の研究方法が提示される。それは、保守的自由主義者という視角から新渡戸をとらえるという方法であり、非常に多面的な活動を行う一方、学術的な主著と呼べるような著作は残さなかった新渡戸を研究するために有効な方法であると主張する。第 1 章は、第一高等学校校長時代（1906～1913 年）の新渡戸の研究である。この時代は、日露戦後に訪れた一種の閉塞感の中で、個人主義的に自己を見つめて煩悶する青年層が出現し、一高伝統の勤儉尚武のバンカラの校風・籠城主義が問い直される頃であった。新渡戸校長は、バンカラ青年に対しては新しい時代のエリートとして社交の重要性を説き、煩悶青年に対しては立身出世を超えた人格の重要性を説いて、多くの学生の共感を得た。第 2 章は、大正デモクラシーの時代における新渡戸の民主主義論が検討されている。新渡戸の議論の特徴は、民主主義という制度が、一時の感情に流されやすい民衆主導によって国家を過激な方向へ進ませてしまう危険性の指摘であり、民主主義の基礎に国民の人格の向上、指導者を選ぶ能力が必要であると説いたことである。第 3 章は、満州事変から国際連盟脱退へと展開する危機の時代における新渡戸の立ち位置の研究である。世界恐慌に代表されるような資本主義経済の危機は、体制への民衆参加を要求するデモクラシー(普通選挙)運動から、体制自体を変革することを目ざすマルクス主義の台頭をもたらした。新渡戸のマルクス主義批判は、それが寛容さを欠いているという批判であり、問題点は体制の枠内で改良できると主張した。この時代、日本は満州事変という実力行使によって局面の展開を図っていくが、それは欧米列強の批判するところになる。新渡戸は、国内では消極的ながら当時の軍部の行動を批判するが、米国において日本の立場への理解を求めようとする講演活動を行うという、複雑な行動をとる。それは、なんとかして、日本と欧米との関係の悪化を食い止めたいという思いがあったと指摘する。終章ではこれらの議論を総括し、新渡戸の保守的自由主義が、英国流の教養作法に基づいた寛容さを基本としており、それは明治末から昭和初期という時代の変遷を貫いていたと結論する。

論文審査の結果の要旨

3人の審査委員が一致して、次のような点で、この論文に高い評価が与えられると判断した。

- ①非常に多面的な活動を行い、ある意味でとらえどころのないとも言える新渡戸に対して、保守的自由主義という視点から評価を行ったことは有効であったし、説得性もあり、先行研究に対して新しい議論を提出した。
- ②新渡戸が強調した人格という概念の根本に、英国流の教養作法や寛容さを中心とした自由主義が存在しているという重要な指摘を行った。
- ③明治末、大正、昭和初期という3つの時期について、時代の推移とその時期における新渡戸の立場を巧みに浮かびあがらせており、博士論文として、まとまりのよい構成になっている。
- ④日本の近代思想史の中における1つの結節点としての新渡戸の位置づけを明らかにした。
- ⑤新渡戸の著作全般に良く目配りするだけでなく、一高『校友会雑誌』所載論説など、全集未収録の資料も博搜して利用した。

なお、平成26年11月25日に公聴会が行われ、学位申請者の論文内容報告、審査委員の質問、研究科教員の質問が行われた。それぞれの質問に対する申請者の回答は的確なものであった。

以上、審査委員による審査結果を総合し、上記論文は、博士の学位に十分に値する業績であると判断する。